

同志への手紙(一九八〇年五月二〇日)

五・三〇声明にかえて

日本赤軍 重信房子

1

闘いつづけている同志、元気ですか？

八年目の、五月三〇日、リッダ空港襲撃闘争の日を迎えています。かつて、そしてこれからも、一つの目的に向け共にまちがいを正しあっていくために、ますます、同志との通信の意義が増大しています。レーニンも、そうであったように、そして、私たちの国際的な同志、友人がそうであるように、自国の革命戦場で闘う同志と、外

えない困難さに直面します。「文通のために……事実や、出来ごとについてはかりでなく、気分についても、運動の中での日常の『おもしろくない』ありふれた茶飯事的な側面についても、情報をあたえるために、書くことを、われわれはおねがいする。諸君は、外国に滞在したことがないので、われわれが、このような手紙をどんなに必要としているかを想像できないかもしれない」「もちろんだれにでも書く能力と興味があるわけではないが、しかし……できないといってはならない。したくないといいたまえ」こんなにプリプリ怒って不満をいっているのは、(私たちも、何度か同志に不満をのべたけれども)レーニンの一九〇四年の姿です。

逆に、自国の内部で闘っていると、目先の現象的なものに目をうばわれがちで、見通し、何のために、今闘っているのかを見失い、一つの目前のことを、自己目的化しがちです。こうしたことが、私たちのまわりにいる友人たちの組織でも、矛盾、不信そして、決裂と本質的に問題を問えずに、組織的な分解をもたらす例が多くあります。

かつて、一つの組織を形成し、自国の革命の嵐のため余儀なく亡命した人々が、亡命中の闘いの中で、ある

から結びあうことのむずかしさを、私たちも、幾度も経験してきました。場所的な条件に規定され、日本世界の革命の利益が、いったい今、何を實現することが問われているか、価値観が、一つになりえていないために、異なる状況の中に拝跪し、矛盾を発展のエネルギーとして統一しあえず、相互の有利な条件を生かすことができず、いけません。総じて、自国の外にいれば、世界的な情勢を軸に、トータルに自国革命の戦略的な方向を、とらえやすいと同時に、具体的な実状が、手にとるように把握し

人はユーロコミュニズムに、ある人は、ソ連のあり方に、またある人は、中国風に確信をつかみ、「確信」のために、自国の革命をバラバラなものにしていっている事実を、目の前にみえます。そして、私たち自身も、国境を越えたとたんに、共産同赤軍派と場所的な距離を、思想的距離としてきずなを失いました。「何か」が、欠けているために、このことが何度も克服しえないで、世界中で、日本で、くりかえされています。日本で、くりかえされてはいないと、同志は考えますか？ 国境を越えるまでもなく、東京や大阪という地理的条件や、獄中と獄外や、目前の課題の前で、価値観が分裂していくことも、本質的には、同じ問題が根本にあります。何のためか、闘っているのか、何が、「正しい」という基準なのか、そこがしっかりしていなければ、本当に目的を實現するために、自分の頭でしっかり考えて、力の一つの方向に結果集しあえません。

同志。同志は近ごろ、社会党と、共産党の革新共闘が崩れ、対立にまで至っていることを情けない事実と、憤慨して、手紙をくれましたね。観点を變えて考えてみましょう。

「党利党略中心の共産党とはやれない」という社会党

の主張も正しいでしょう。「革新の共闘を破壊してきたのは社会党」という共産党の主張も正しいでしょう。誰にとって正しいのか？ 社会党にとって社会党の主張は正しく、共産党にとって共産党の主張は正しいという一面的正しさであり、それは全面的正しさではありません。昔、個々、正しいことを主張しあい分裂します。個々の正しさに固執しても、そこには、全面的正しさをみいだすことができません。全面的な正しさとは、敵の前で、力を一つにできるように、どうしているのか？ いくのか？ ということから戦略的に考えなければなりません。そういう意味でいえば、「革新共闘が対立になった」というのが、事実の中心であり、その革命にとって有利でない現実を導いた根拠を、人のせいにならず、自己の革命化にむけて問う観点さえあれば、改造しあう点、例えば、共産党の統一戦線に対するまちがった考えを、共産党の人々がただす契機にもなっていくでしょう。日本共産党はいいこともたくさんしていますね。しかし敗北しています。日本共産党は、日本共産党を排除する勢力に対して排除の論理でこたえることによって反共攻撃を防御し、原則を堅持するかのように考えています。

どのように排除され、攻撃され、敵対行動をとられて

## 2

日本の同志、人民から学んできたように、イランで、ラテンアメリカで、パレスチナで、アフリカで、アジアで、闘っている人々からも私たちは、多く学んできました。そして、ささやかな私たちの経験を、そういう人々は、貪欲に学ぼうとします。いわば、必要に迫られたその学びあいの中に、国際主義が着実に進んでいます。「必要に迫られた切迫した情況」って一体何でしょうか？ 机の前に座って理論を考えると、本屋にたちよって文献を探しまわるとか、そういうことと次元、いわば観点が、ちがいます。「愛する親や、兄弟や、民族の自由がほしい」「自己の運命の決定者として、自分自身の主人でありたい」「人々と共に、助け合って生きていきたい」そうならない現実を、どう変えたらいいのか？ その現実さの中で、共に教訓や、経験を提起しあいます。もちろん「そうやっているから失敗するのだ」とか言い合う激しさや、うけとめるには、面目に、かかわることもあるでしょう。でも、勝利するために、大多数の人々が、共に助け合い生きるために、「今をどう変えて行くのか？ 変えなければ敗けつづける」という事実の前で謙虚さ、真

も、いいじゃありませんか。じぶんは敵対しているか否かが統一戦線の基準ではないのですから、形態をゆずって、例えばちがうあり方で、参加し、中身をとるよう努力しなければなりません。批判を返すことよりも、そちらが、党の中心におかれなければならないと思います。共産党なのに、政党政治の枠の中で政権構想としてしか統一戦線をとらえていないことが問題ですね。個々にとって正しさを主張する時、そこには、正しさの理はあります。しかし、それは基準にはなりません。「全面的正しさ」ということを、考えてみましょう。その価値観の中に、勝利の根本があります。

同志は、「党は、政党も新左翼もダメだ。だけど、やっぱり勝つには、党が必要だと思う。自分のところで精一杯闘っている力を、どうしていったら良いのか？」と、問いつつ「やるしかない」というところで考えていますね。そんな同志に、「最後の党をつくらう」と、私たちが言ったら笑いとまどう同志の顔がうかびます。根本から考えを変えて、力を結集していけば、それができると確信しています。そのことを、丁度、この機会に、同志へ、私たちの総括と見通しとして提起し、共に、力をあわせていきたいと思えます。

剣さがいいつも「こだわり」を凌駕する力としてあります。一番大切なことは、自分たちが絶対正しいという考えを疑って進むことです。自分たちが正しいと思ひ込んで進めば、頭の中に価値があり、現実を変えることにたいした価値を、おこなくなり、正しい頭の中を懸命に文章化することに終始するこっけいさに結果します。自分たちが、もう分かっていると思えば思うほど新鮮な現実、創造性を失います。何故、これを強調するかといえば、勝利した、または、勝利しつづけている革命と、敗けつづけている革命の根本にかかわる問題だからです。

同志。かつてマルクスが「哲学者たちは、世界をただ様々に解釈してきただけである。肝心なのは、それを変革することである」といいましたね。毛沢東は、「革命の根本問題は、哲学」ともいいましたね。革命は、現実に対する見方、考え方から、何をめざして、そのために今を、どう考えつづけていくのか？ この現実を変えることの重要性が、排除されたところには、何の革命性も育ちません。自分たちの現実の見方が正しいとか、目指していることの正しさを、論証することに価値をおいている姿は、やはり頭の中に価値をおいている姿です。「正しさ」に立脚して、そのために今をどう変えつづけていく

のか？ という行動と、行動に媒介された理論には価値があります。何故なら、現実を変えることに価値をおきそのために闘う中で、主観を、とりかえることが可能だからです。現実を変えるための理論は、価値があります。レーニンのように。

同志が、「党派は、いつていることと、やることがちがう」と批判するように、どういつているかではなく、どうやっているかに、実際の姿があります。人民のため、革命の勝利のためのつもりでも実際の姿が、どうも党利党略（内ゲバもそうですね。）であれば、やはり頭の中の正しき中心で、現実を変えることが、中心でないために自己肯定している姿です。そういう党は、いくらでもつくれるけれども、また、革命を敗けつづけたままにしつづける根拠にすぎません。

たとえばアフリカの同志の話は、教訓に富んでいます。二〇年前に、闘いを始めたころ、百パーセントのマルクス主義者や、二十パーセントのマルクス主義者や、マルクス主義と何ら関係のない人々が、バラバラに闘っていました。百パーセントのマルクス主義者と自称する人々は、マルクス主義を信奉しない人は、大衆くらいにしか考えないし、マルクス主義と関連のない人は、民族

の利益のことしか考えない偏見もありました。現実はどうなっているか？ 現実を変える力は何か？ 敵の攻撃の局面局面で、今を変えなければ、闘えないという実態から統一にむけて、アフリカの同志は、走りまわりました。解放戦線としての出発です。戦線は、一つの基本目標で統一されていますが、個々の党や、組織のやり方はバラバラです。統一の名のもとに銃撃戦で、争うこともあったといえます。今、何をすることが必要なのか？

そこにすべての力を結集して、アフリカの同志たちは、闘ってきました。正しい主張は、もたらしたいし、まがった自分たちは変えたらいい、敵に勝利し、人民がすこしでも前進するために、すべての力を注いだ結果、その人々は、今では、解放戦線の主力部隊になっています。人民のために奉仕するというのは、そういう姿だと思います。よく、統一にむけて五年も十年も、それ以上も、ねばりよく働きかけた、その時のエピソードなどを聞いて、私たちも多くの教訓とするとあります。

### 3

同志、日本の革命は、何故、敗けつづけているのでしょうか？ 世界的に、日本も含めて資本主義支配を困

難にする人民の目覚め、決起、社会主義の勝利があり、客観情勢は、有利に展開しています。にもかかわらず、指導勢力である党が、革命の指導的勢力として闘いていないことに根本的弱点があります。まず第一に、党派と名のつくものがたくさんありながら、その存在価値が不明です。第二に、「党」が、実際の姿から出発していないので、現実の戦力たりえていません。第三に、党を中味ではなく、形態で考えていることに問題があります。

第一の問題は、党が何故必要なかという問題。同志も、「新左翼も政党もだめだ。だけど、やっぱり勝つには、党が必要だと思ふ」といつていますね。同志も、そこで悲観せず必要な党をつくってゆくには、どうしたらよいか、一歩ふみ出して考え、実践していく必要があります。現実、人々が共に生きられない、人の価値が、金の価値におきかえられているために、安い人と値段の高い人がいたり、物質的にも、恵まれてるものと、そうでないものがある、人としての価値が、そんなところで決まるのはゴメンだ、みんなが共に生き、共に享受しあう社会に、変えたい、これが、同志も、私たちも、単純な革命の欲求だと思います。そして、社会を変えるために、その敵対象にむかってうちやぶりながら、みなが、力

を一つにしていき、一つにしていく過程で、価値を創造しながら、新しい社会で、みなが、主人公として、生きる条件をつくっていきます。そのためには、みんなが結束しなければならず、みんなが、力と心をつ一つにしていかなければ、社会を、かえられません。みんなの力と心、行動と考えを、質的にも、量的にも、一つにしていくには、結果する中心が必要です。中心の役割が党の役割です。だから、党が、中心としての役割をなす価値基準は、質的、量的な、人民の結集を促進しているのか、それとも分散させているのかにあります。それが実践の中で運動の方向を戦略的に戦術的に統一を果たしているのか否かで計られます。中心の役割をなす党は、常に、敵と味方、今、自分のもとに結集しているか否かにかかわらず、階級全体の中心たりうるように、自己を革命化して、中心たりうる役割に向けて、かわっていかなければなりません。敵以外の味方であるべき全体を、どう反映しているのか、自己を批判的にとらえかえせるかどうかが生命力になります。党の革命しつづける姿に反映されて、人々の結束は、ますます、果たされていきます。

ところが、現在まで、私たち自身が、かかわった新左翼、あるいは、旧左翼は、どうだったでしょうか？ 同

志が、ダメだという根拠もその辺にありそうですね。「権利だけを主張する悪質な民主主義者め!」と、新左翼をバ倒する手紙を、旧共産党員からもらったとき、私たちも、耳痛くともらえかえしたことがあります。結局、これまでの党のあり方が、「中心である」という役割ばかりを主張して終わっています。自分たちが中心だ、いや我々が中心だと。そう自己主張していないところで、実践の中では、そういう自己主張の姿がめだちます。味方の戦略的統一にむけて、誠心誠意尽力するから、中心たりうるのですが、何もそういうことをやらず、自分たちの党が中心だという前提にたつ考え方がまちがいをつづけています。階級全体味方全体からみて、自分たちの党的役割を、どう果たしていくのか、つまり、統一にむけて、どう中心たりうるように主体変革を果たすのが、正しい基準です。自分たちのもとに結集したものが、革命的だとか、進歩的だとかは何の基準にもならず、あたかも、その自分たち以外は、味方に数えないという自己中心性があります。階級の中心をつくる闘いとしてとらえず、すでに、所属している「党」へオルグするというあり方の中に、分裂を促進してきました。そういうあり方は、ある一時期党派にとりつかれても、去っていく

現実を、どう考えて、統一していくのか、そのためにどういう中心たりうる主体の革命を果たすのかではなく、自分は座して現実を変えず、頭の中をあれこれ変えて自分の都合にあわせて解釈し、納得する、あの阿Qの姿を、私たちは、忘れないようにしなければなりません。そのためには、まずもって、現実の姿、自分たちの客観的現実から出発しなければなりません。

どんなに高尚な理論、高尚な分析をもっているても、どんなに絶対的な綱領をもっていると自負しても、それが、現実の姿とどういう差があるのか? が問題です。「絶対的に正しいわりには、人民の結果がわるいのは、どうも人民のせいばかりではないぞ、言ってるだけで、何もやってないせいかもしれない、絶対的正しい内容に問題があるのかな」と、疑うことから大衆に変わって、自己を点検することです。大衆点検をうける能力を、党が、もつことができるのは、実際の姿に、価値をおくからなのです。そして、その差の中に党がまちがいを発見し、改造する発展の力が、宿っています。何を言っているかという「つもり」ではなく何を、やっているかということ

を基準に、言っていることの落差を認め、誠実に、それを改造する観点を党がもてるようになれば、日一日、

ものをふやし、また、反共宣伝を許す原因となります。

第二に、党が実際の姿から出発していないという問題です。実際の姿から出発すれば、現実の関わりから現実を変える力も出てきます。現実を変えることに、最大の力を、注がないのも、そうした、観念的なところに、価値をもちすぎているためです。

実際の姿に価値をおかなかったことは、連赤の最大の敗北の根拠でもあります。今、自分たちは、豆つぶのような勢力であり、共産主義化にむけて、何を克服していくのか? ありのままの姿、強さでなく、弱さを、共通の問題として変えあっていくことが連赤の時、問われていました。共通の弱さを、みんなの問題、自分の問題、人民の問題として変えあっていくことが、必要だったのです。ところが、その実際の姿を、どう変えるのかではなく、あるべき姿、頭の中の価値観から現実をみようとするために、今、自分たちが、何をしているのが、みえないのです。何故なら今、何をしているか(同志を殺している)に価値がなく、雄々しい共産主義化が、今のあとには、つくられないという観念に価値をおき、現状肯定、どう変えるかではなく、現状肯定を、くりかえしてしまいました。

何年か後、徐々に、日本の革命が、発展するという確信を同志も忘れないでください。

まず実際の姿をみることに、認めること、本音と建前といても良いし、本当の姿から出発して、建前で足もとをみられなくなる自分たちを変えていかないと、党は、いつまでも、現実を、変える役割をつくれなものです。こちらでも、いろいろ党派の機関誌を読んで学習しています。六〇年中期以降、七〇年代の闘いの総括として、新左翼の八〇年代にむけた動き、日本共産党の革新共闘の崩壊以降の動きがわかります。プントや毛派の流れの中で、とくに、単一党をめざした統合の動きがたくさんありますね。客観的な情勢の要求というよりも、それに対応する主体上の問題から、活路をみいだすべく、統合が要求されているようです。とくに、いくつかの新左翼世代と、旧共産党の老人同志世代との統合は、興味深いことです。私たちは、新旧世代が、教訓と総括で固く結ばれ、革命力の結集をはかることを、日本革命の継承性を敗北から勝利に転化するために、たいへん必要なことと考え、そのあり方を学んでいきたいと思えます。しかし現在の統合のあり方をとらえてみると疑問を感じます。これまでのように戦術、運動的な展開では闘えないが

故に、思想軸を求めて統合しあうことが、旧世代の結合としてしか行いえない新左翼の限界を一方に物語っています。同時に旧世代の革命と経験が、日本共産党を、革命しめけなかった総括として果たされていない現状を認識せざるをえません。何故なら、統合の方法論そのものの中に、主体的な敗北の総括が果たされていると考えられないからです。現在の日本の革命は、統一を要求していません。しかし、それは、日本革命を、敗北させてきた自己批判の総括の上に、一致し、自派を否定して解体することを通して、思想的に結集することが、要求されています。組織形態の継承の上には、統合自身なりたちえないのです。

まずもって、実体、相互の主体実情を正しくとらえかえし、言ってきたことではなく、やってきたことの総括を一致することぬきには、単一党形成を果たしえないと思います。

日本共産党、新左翼含めて、「現実を変えるために、みんながどう結集するのか」ということに価値基準が置かれていないのです。「自分たちが、どう正しい主張をしてきたか」を提起しています。その人々の考え方が正しかったかどうかは、革命の価値ではありません。正し

目指す社会を実現する方法とその実践に、その党の思想性が如実に示されます。そこに、階級全体をどのよう

に結束させようとしているか否かという姿があらわれます。そして、その党の内部統一のあり方がまた、階級全体を統一していこうとするやり方と、共通しています。党は、形はどうあれ、中味が一つでなければ力になりません。統一に中心があり、統一する実践に価値があります。敵に対決して力と心を統一しつづけることを通して、一つの有機的意志体として、実践しつづけるければなりません。会社のように、考えがバラバラでも、いわれたことは報酬のためにやるという実践、つまり、自分にとって価値のあることはやるとか、指揮にしたがうことが、形だけのものではなく、中身、つまり、勝利の目標、どういう方法でどう実現するために、今の実現、敵と味方、その中心であろうとする自分たちをどう変えていくのかを、常に実践によって示すことです。

党の役割からして党の価値の基準は、戦略的に味方が一つになっていけるかにあります。戦略的に一つになっていくことは、そのために私たちをととのえることではなく、勝つために、今何が必要かという考え方を常に統一して進むことです。もちろん、価値、考え方が統一され

かったかもしれないが、実際どう勝つために、変えたのか、党と名のる以上、敵に対決して、味方全体に、どうしたのが中心問題なのです。そうしないと、客観的には、「正当化」したまま、敵味方の関係は何も変わらないという、この現実を変えることができません。

第三に、党を中味ではなく、形態で考えるという問題です。党を形態でとらえているために、階級の党は一つでなければならず「中心であろう」とすると、そのひたむきな努力そのものが、内ゲバになったり、「連赤」になつたりします。レーニンの党も、毛沢東の党も、カストロの党も、形態は、ちがっても、中身は同じだったと私たちは考えています。ピラミッド型でも、アルジェ方式でも、形は、その国々の条件にあわせてつくらなければ敗北します。

新しい社会を今からつくっていくために、階級全体、更には、敵以外の味方にすべき人々を、どういう実践を通して結束させていくのかという、階級全体の、中心の役割の問題です。中心は、実践によってしか、中心たりえません。中心の役割はどういう形態であれ、質的、量的統一を果たす実践の先導者ですから、まず統一されていなければなりません。

ているかどうかは実践に示されます。一つになるためには、現実の一つになっていない根拠をとらえ、一つになるように実践していくことです。一つになれない根拠は、革命の価値が、どこかちがうことにおかれているためです。もちろん、どの党も、「つもり」としては、一つになる気はある、実際の姿として、一つに全体を結束させる気がないということを示しているのですから、実際の姿から、出発する必要があります。正しい、正しくないという価値基準も、マルクスや、レーニンがいったから正しいかどうかでなく（この考え方も、形態なのです）、味方を統一する方向に進んでいけば正しく、進んでいなければ、まちがっているのです。でも、ミソもクソも一緒に一つになるということ私たちは主張しません。組織的合意とか、そういうかたちで一つになることではなく、社会に対する、人に対する、自然に対する考え方を、一つにしていくことです。形態は、別々でも、そうして観点を一つにしていけば、中身も統一され、また、形態も改造されていきます。ところが、党を形態で考えれば、今の姿は別にして「中心、前衛であるべき」ために、規約で統制されなければならず、指揮にしがわなければならず、いかに正しい中心であるかを

主張するために、理論化されなければならず、他組織を認めることができなくなりません。党の役割は、勝利のためのものです。人民の力を一つにしていく推進者である党がバラバラを再生産します。力を一つにするために、考え方を一つにしていくこと、いきつづけるその闘いには思想統一がうまれます。それは、特別な人が統制するのではなくて、考え方を出しあうこと自身、黨員みなが一にむけて統制しあうことになります。党がこの思想統制を中心に、内発的結果によって指揮が統一されていかなければ、硬直した形だけの党、だめな人間は、排除される党、人の中身が変わらず、人が、出たり入ったり、いれかわるだけの党にしてしまいます。

同志、知識や能力は、あった方が、ないよりは、よいことですが、黨員の一番不可欠の条件は、どのような時でも敵をうちやぶるために行動を統一し、行動の観点を統一し、自分を変えながら実践することができるかどうかにあります。同志は、だめな党派の現実を語り、自分のところでは、精一杯闘う力を、結果しようがなく、しかし、やるしかないといっています。どう精一杯なのでしょう、どうやるのですか？ 自分が、精一杯やるにしても、そこには、価値はなく、必要なことにむけて、ど

うみなを統一しつづけて実践するのかを、具体的に考えていく必要があります。今、日本革命の全般からいえば、勝つために、敵をしっかりと定め、それを、うちやぶるために、今、何をしなければならぬのか、国際国内の帝国主義と対決して、味方を戦略的に結集していくために、どういう実践を中心に党を育成するのか？ が問われています。私たちは、味方の中に、今、党のかたちではなく、中身を、どうつくるのかを中心に考えていくよう、同志に提起します。

4

だから、同志、こういう条件の中で、党の問題を考えたのか、どうしてそういう考えに至ったか、いっておく必要があると思います。

まず、七一年段階では、率直なところ、理論的確信が赤軍派にあったわけではありません。

「先進国プロレタリアートが、唯一世界性をもつ」とか「毛沢東の地方主義、赤軍派の普遍性」だとか、いろいろ、やはり実際の姿ではなく、頭の中の価値を理論闘争としていたし、また、行動では、もともと犠牲性に燃えて闘っている自分たちに価値と満足をもっていただけでしょ

う。そういう実態ですから、国境を越えた時から、自分たちの実態に立脚していない論理が役立たず、それを、あれこれ修正手なおしで、つじつまをあわせようとして、敗北し、はじめて、誤りを悟りました。敗北を認めるのは、まだ、たやすいのですが、誤りを認めることは、それよりも勇気のいることです。主観的には、率直な国内母体への提起は、誤りを認めよと、自分たちのことは棚に上げて、つまり、総括として提起できず、遂に国内からは、指揮に従えという無内容な怒りをさそい、分裂してしまいました。その時、私たちは、自力でやる闘いにふみだしたので、決意はするように高らかに燃えても、自信はなく、自信のない分まけ惜しみも含めて、日本

の人民を代表して闘うぞ、階級全体を代表して実践するぞと、耳をかたむけ、目を開き、学び学びぬく中で自分たちを変えようという闘いから始まりました。今から考えれば、まちがったことをも学んだりしてきたことも多くあります。

知識や能力があるわけではなく、特別な人間ではなく、普通の人が革命をやるといって、私たちの出発点は、逆に様々な地域で闘っている人々の革命をやる姿と共通していることをむしろ、発見しました。勝つために現実をど

う変えるか、そして、変えうる主体として、自分たちをどう革命化していくのか、ここに人民の創意工夫があり人民を代表する普通の人々が、変革しあい、変わっていく姿があります。

しかし一方で、「自分たちは、アラブ戦場で日本人を代表して闘い、国内に闘う党が出来たら合流しよう」と考えていました。しかし、いっこうに、自分たちが望む党はできませんでした。自分たちが、真に、国際主義を実践する道は、自分たち自身が、力と心を尽くして、つくる闘いを担わない限り、そんなに虫のいい話はありません。党を望むなら、自らが、つくることぬきに存在しないということをとらえかえしてきました。そして、どのような条件で、どのようにつくるかでは、やはり、運動的發展、戦術の積み重ねの、軍事の実践からつくり出して行きました。その行動の中で、どれだけ味方と一緒にしていくか、自分たちを変革していくかと、とらえきれず、敵を、どう物理的に解体していくのかを中心に考えていました。(ちなみに、多くの解放勢力の中で、どう敵を物理的にたたくのみに終始した勢力は、ずいぶん霧散して行きました。どう敵をたたく中で、味方を統一していくのかを、中心として考えた勢力は、この一〇年の

間に、指導力を実体的にたくわえました。)

私たちは、一つ軍事行動が出来たたびに、何かやれた気分になっていきました。そして、その、いつてみたら自分の力を、わきまえないあり方が、七四年のパリで敗北、ストックホルムでの逮捕、自供に結びついていきます。七四年の連続的な敗北は、多くの学ぶ機会を与えてくれました。同志も、知っているし、心配もして、くれましたね、あの時の最大の教訓は、階級の責任は、切っても切れない、一つのものだということです。革命の名において、あやまちを犯せば、人民全体に害毒が及び、ここまで責任をとる、とれると思っただけで、これが、敗北を拡大させる根拠となるということです。たとえば、パリで、私たちのやり方のまずさが、第三世界の同志友人、私の、ヨーロッパの同志友人が、秘密の二重生活をあばかれ、追放され、暗殺される事態もありました。更に、逮捕後の屈服、自供が、闘う同志、友人に様々な攻撃の根拠を与えたりしました。私たちは、何という革命の犯罪をつくりだしてしまったのでしょうか。「日本赤軍として責任をとりませう」と口先でしかいえず、あやまることしかできません。しかし、損なつたものを償えるのは、より正しく、より隊伍を強め、実践によつ

すこと、つまり、現在の実際の姿が階級のほんの一部の力に立脚しているにすぎないが、にもかかわらず、不断に階級全体を結集しうるように党を革命しつづけることが、建党の中心問題としてあります。味方の質的統一にむけて、自己を不断に革命化していくこと、この観点を軸に指導勢力が、実践的に、闘いぬくことによつて、党は、革命されつづけ、質的に統一性をつくり、そのことによつて、形態を規定していく必要性があります。

同志、そのためには、味方のやっている正しいことを学習しあい、まちがいをひきうけて克服しあい、何派、何党と組織は別々でも、中味を一つにしていって求心性を発揮しあわなければなりません。だから、私たちは形態から出発し、中味が不統一のまま、形態においてのみ強化される組織、つまり形式主義的なあり方を否定します。レーニンの名において、統合の前の分離を語り、組織の立場という名においてセクト主義をばびこらせるあり方、しかし自身は、思想的区別なく混在する今の、党のあり方を、全面的に否定するところから、私たちは出発します。自身、党性をうちたてたことを実践の中でない、その思想的きずな(単純にいえば、自己を批判する能力をもつ党、党を革命することを建党の中心におく

て点検をうける方法はありません。誰かに責任を回避して生きのびる人々は、いつも脱落していきます。最後に人民のせいにして、正しくない自分たちをもみれなくなりませう。誰かのせいにして生きのびる貧しさよりも、流れる害毒がどの組織のものであれ、ひきうけて、自分たちの改造に結びつける方が、どれだけ、党と、革命を前進させることができるでしょう。私たちは、その時階級の責任は、一つであることを、だからこそ階級の党は、全体を結集する立場と観点によつてしか、つくりえないことを学びました。つまり、敵に对决しようとして犯した革命のあやまり敗北は、主観的に他組織のものであると主張しても、客観的には、自分たちの闘いを左右させるものであること、逆に敵に対決した革命勝利の、一歩一歩は、日共の勝利であれ、何々派の勝利であれ、私たちの力となることを、党を一つにしていって闘いと、結びつけて考えるようになりました。

どの指導勢力も、主観はどうあれ、客観的には、人民が結集する中心としての役割を要求され、自らも中心だと役割を主張し、しかし、中心としての役割を全く果たさず存在している以上、人民は、敵の前で丸裸で対峙することになります。現在から、中心としての役割を果た

党性)によつて、一人から二人と、統一を促し、実践しつづけます。それは、まず、第一に、過去の経験教訓にもとづく総括を一致し、第二に「党の革命」の党性によつてたつ綱領的結集によつて、第三に、革命の道すじと、方法において統一していくことです。更に、第四に、その思想的な力を、物質的な力に転化する組織が必要です。組織的な形としては、革命化されつづける中心部として、組織形態をうちかためるでしょう。そしてこの組織は、いつも、中心たりうるように革命しつづけるが故に、全面的正しさに不断に変革しつづけるが故に、勝利を導く根拠をもっていると同時に、最後の党たりうる条件をそなえていくのです。同志、私たちは、現在、その最後の党を建設する一部の主体として、中心の役割へ自らを結集させていくこと、つまり、自己批判を指導思想とする主体確立を軸に実践を展開しています。その現在のあり方として、日共の実践も、諸派のやり方も、自分たちの姿の一部として、自分たちの問題として改造しあつて進む実践が問われています。

誰かエリートや、特別な人に従属するためにではなく、普通の人民が、力と心を出しあい、考え、連帯しあつて生きるために、私たちは、革命を求めている以上、革

命の出発点から問い直すよう、同志にすすめます。実践論や党八股の中でも、毛沢東が書いていたでしょう。知識におどかされたり、能力で人をみたりせず、同志自身が「頼る」ためにはなく、解放を求めるために、党の建設に一步ふみだしたらいいのです。それは、現在のどこかの組織に入るといふことからはいいのです。つくらなければならず、つくり方も、まず実践の中で、思想的結集（立場観点の一致）をめざし、そして、政治路線を一つにしていく闘いのあとで、形態を規定していくことです。

世界中の闘いは、日本革命を包囲しています。同志の一步は、世界の闘いをも、また、援助するものとなるでしょう。アメリカの挑発的なイラン軍事介入は、今、様々な味方の結集を促進しています。それについては、また、書きます。

リッダ闘争の戦士たちの出発点は、勝利の革命に一步自らを近づける実践によって、継承されることを、私たちは忘れずに進みます。

同志の返事を再び待ちます。

再会まで。